嵯峨の屋おむろ初期作品の成立および出版に関する考察

『守銭奴の肚』『ひとよぎり』『美人の面影』『苦楽の鏡』

三 川 智 央
三川智央

二

では、見過ごすことのできない重要な存在であると言える。こうしたことがから見て、嵯峨の屋おむろは、明治期、中でも明治二十年前後の小説の実態を明らかにする上でも、注目されることがほとんどない状況が続いている。ちなみに、一九七〇年代刊行の『明治文学全集』二巻末の『解題』には、『二葉亭の諸作品が全集』そのものが研究対象から除外される傾向が続いている。このように状況にあって、彼の初期作品に至っては、著者が著者として残っている明治期の刊本によってみるのと、著者の名を冠した巻は設けられず、彼の小説は、一九七〇年代刊行の『日本近代文学大系』47 明治短篇集』の中にも、『初戀』一編が収められているのみである。しかも、嵯峨の屋の初期の小説は、近代の戦の様相を濃く残すものであったため、近代文学研究においては、作品そのものを研究対象から除外される傾向が続いてきたという経緯もある。過去の研究において、彼の初期作品がどのように評価されていたのかも主なものを利用してみると、次のようにになる。
嵯峨の屋の處女作は、明治二十年三月刊の《浮世情人”守銭奴”之肚’》と題するものである。（中略）調子は三月に公刊された《ひとよぎり》で、これは明治二十四年十二月刊の《大阪浪花新聞》に連載されたもの。翌々廿四年三月、単行集として刊行。中略・その構想において、假名垣家文の《安楽誇語》を偲ばせるものである。（中略）この作も三馬の例の《浮世風呂》などを偲ばせるものである。中の作は、同廿年の十二月に同百感美人の面影。十二月に同百感美人の面影。ついて二十年十二月に《浮世情人”守銭奴”之肚》である。ついて二十四年二月に《浮世風呂》などを偲ばせるものである。これらは一観を未見であるのが、戯作調の濃厚なものである。中略。《浮世情人”守銭奴”之肚》を発表して以来に出た。みずから三馬、一九の影響を受けた（和田繁二郎、一九五九年）
三川 智央

というように、『守銭奴三星屋喜右衛門の珍妙な恋を通じて、浮世の人情をうかがう』、世相を諷刺したものである。

処女作は『守銭奴の肚』（明治二〇年一月刊）であり、遺稿の序を付して出版。寄稿人質の主が一冊に収め、題名を「ひとよぎ裏」（金港堂単行20・12）としている。

が、本間久雄氏『明治文学史』下巻によれば、いずれも通俗的な戯作の域を出ないものという。

『ひとよぎ裏』（二〇・二）は、彼自身言いうように、三馬、一九の影響が濃厚で、戯作の域を出ない（ただし、美人の面影は未見。また遺稿、柿の葉、に行っての加筆で截せたというが、この作品はまだ確認されていない）。

習作期の彼の作品は、『浮世の人情』（守銭奴之肚）（二〇・二）で、百人百感、美人の面影に透かれていて、作意は西鶴の『胸算用』に似ているが、これまであきらめ、愚作にすぎない。

習作期の彼の作品は、『浮世の人情』（守銭奴之肚）（二〇・二）で、百人百感、美人の面影に透かされていて、作意は西鶴の『胸算用』に似ているが、これまであきらめ、愚作にすぎない。

（十川信介、一九七七年）

（吉田精一、一九七〇年）

（十川信介、一九七一年）
したが、いずれも戯作的で習作の域を出ない。

嵯峨の屋の初期作品として、「守銭奴の肚」「美人の面影」「ひとよぎり」といった題名があげられているが、い
ずれも「戯作の域を出ない」ものとして、片付けられてきていることがわかる。

だが、はたしてこれでよいのだろうか。たしかに、ここにあげられた嵯峨の屋の作品はどれも、
戯作の影響から抜け出していない作品なのかかもしれない。しかしそのことによって、近代文学としての小説というものがまだまだきっかけした形を成さずに
いた当時、小説と戯作との間に明確な区別があるはずはない。むしろ、近代文学と近代文学の狭間にあって、いずれの領域からも等間視されていったような作品にこそ、近世
と近代をつなぐ手がかかりが隠されているのではないか。

私のような問題意識から、嵯峨の屋おむろの初期作品に目を向けたみたいに考えている。しかし、ここ
に引用した過去の研究においても「未見」ということばがしばしば登場するように、彼の初期（明治二十年前後）
の成立や出版についてもはっきりしない部分が多い。

本稿では、嵯峨の屋の初期作品研究の前段階として、彼の

五
まず、先ほど引用した研究以降、嵯峨の屋の初期作品を扱った研究が二件あるので、先行研究として、その内容を確認することにする。

一件目は、一九七九年に発表された論文、高田知浩『嵯峨のやおよむの作家的出発——『無味気』の前後』である。この論文の中で高田は、「嵯峨のやの第一期」に関するそれまでの研究を概観した後、「作品のひとつひとつに即しての精細な考究はいまだされていないというのが現状である」と指摘し、嵯峨の屋の初期作品についての本格的な整理と考察を行った。論文の一部を引用する。

この期に属する作品としては『守銭奴之肚』『美人の面影』『ひとよぎり』の三作を挙げるのが常になっているが、ここにももうひとつ、明治三十二年（一八九九）三月に上梓された『苦楽の鏡』が加わる可能性について誰も指摘していないのでは不思議なのである。なぜなら、『苦楽の鏡』の内容と手法（中略）『美人の面影』と同工である上に、明治二十年三月十一日に出版された『苦楽の鏡』が、三月十九日に出版された『美人の面影』を参照してみるたびに、ともに大阪俳舘館から出ている両著は本の型式から紙質にいたるまでほとんど完全に一致しているばかりか、奥付の著者名が『香川倫二』という筆名義になっているところまで共通してい

六
ことという事実があり、『美人の面影』の方は二年前、明治20年に大阪の『浪華新聞』に連載した小説の単行本化であることが嵯峨のや自身によって明らかにされている以上、『苦楽の鏡』もまた同じような経過を辿って上梓されたのではないかという推測が当然生まれてくるはずだからである。加えてこの両著共通の著者名であることが「上左様」という「苦楽の鏡」の自序の末尾に「中略」今日より古い紙を埋めるにあたっては外題は「三面苦楽の鏡」連載小説を関心者に先立つ作者口上の転記と推定される事実を勘案すれば、『苦楽の鏡』が『美人の面影』と似たものであるべきで、連載新聞から出版された『美人の面影』の刊本と比較して両者の刊行時期や刊本自体の共通点などから、この二作品の存在を新たに指摘している。また、それを明治20年の『浪華新聞』が連載後、明治22年三月十一日に大阪俳業館から刊行された『苦楽の鏡』では、高田が新たに指摘した内容をまとめる内容をまとめるものである。過去の研究に加え、高田が新たに指摘した内容をまとめると、次のようにになる。
三川智央

『守銭奴の相』 明治二二年一月刊行。
○『美人の面影』 明治二二年一月、『浪華新聞』に連載（未見）。 明治二二年三月二一日、大阪徳楽館より刊行。
○『苦楽の鏡』 明治二二年三月二一日、大阪徳楽館より刊行。
○『ひとよぎり』 明治二二年一月、金港堂より刊行。

なお、高田は、同じ論文において、『守銭奴の相』『美人の面影』『苦楽の鏡』『ひとよぎり』の内容についても考察を行い、『ひとよぎり』がこの四作品の中では最後に成立した作品であるという前提のもとに、『前作が三馬流の旧作形式に持ち物を土台にして遙遙の（中略）心理描写の主張を採り入れた、改良小説のスタイルを素直に踏んでいるのに対し、『ひとよぎり』の方は（中略）逆にこのような創作態度と創作方法を嘲笑しようとする作者の意図が然としているところに、このような前作との最も基本的な相違が認められる』とし、『ひとよぎり』から「少くとも明治二十年の前半までには遙遙の忠実な弟子として『人情』『世態』の活写に取り組んでいた嵯峨のやが、同年末にはそのような方法を根底的否定する立場に移行しているという急速な変化があった」ことが読み取れると論じている。非常に興味深い論考だが、ここではひととまず、高田が『ひとよぎり』の成立をこの四作品の中では最後と考え、自説を展開していることを確認しておきたい。

二件目は、杉崎俊夫が、一九八五年に刊行した著書『嵯峨の屋おむろ研究』の第四章『戯作の残照——習作期』の作品を『守銭奴の相』『美人の面影』『苦楽の鏡』『ひとよぎり』の内容についても考察し、『ひとよぎり』がこの四作品の中では最後に成立した作品であるという前提のもとに、『前作が三馬流の旧作形式に持ち物を土台にして遙遙の（中略）心理描写の主張を採り入れた、改良小説のスタイルを素直に踏んでいるのに対し、『ひとよぎり』の方は（中略）逆にこのような創作態度と創作方法を嘲笑しようとする作者の意図が然としているところに、このような前作との最も基本的な相違が認められる』とし、『ひとよぎり』から「少くとも明治二十年の前半までには遙遙の忠実な弟子として『人情』『世態』の活写に取り組んでいた嵯峨のやが、同年末にはそのような方法を根底的否定する立場に移行しているという急速な変化があった」ことが読み取れると論じている。非常に興味深い論考だが、ここではひととまず、高田が『ひとよぎり』の成立をこの四作品の中では最後と考え、自説を展開していることを確認しておきたい。
楽の鏡」「ひとよぎり」の四作とも、それぞれの刊本の書誌情報を見明らかにするとともに、内容についても詳細な考察を行った。

それによると、実際の刊本を確認した上での書誌情報に関しては、従来の研究を裏付ける形となっている。特に目新しい提示はなされていない。また、「苦楽の鏡」についても、高田の推論をふまえ、実物は確認されていないもの、「おそらくこの推定である」と、「美人の面影」の連載に続いて「浪華新聞」に発表されたものと認識している。

三川智央

高田が先ほどの論文の中で『ひとよぎり』の成立時期を、刊本に掲載されている嵯峨の屋自身による「序」の日付を根拠として、明治二十年（十二月長十日）と考えたのに対し、那里には（全面的には賛同しかねる）として、坪内遙生の日記抄録「幾むかし」の明治十九年十二月二十一日の記録に「金港堂、嵯峨のや、やの稿を買る」とあることから指摘する。それが二年後の十年十二月二日刊行された『ひとよぎり』以外に考えられない」と論じる。だとするところである。

管見では、『嵯峨の屋おむろ研究』における杉崎の論考以降、嵯峨の屋の初期作品に従って、『守鏡奴の肚』『美人の面影』『苦楽の鏡』『ひとよぎり』の四作品は刊本が実際に確認され、その出版の状況や内容についての具体的な考察が行われていない。ものを、各作品の評価の前提となる成立時期を含め、いまだ曖昧な点は多く残されているということになる。

こうした点を明らかにしていくため、まずはあるため刊本の確認を行ってみた。幸いにも現在は、『守鏡奴
以上のデータを見るとき、『守銭奴の豚』『苦楽の鏡』『ひとよぎり』については、先行研究と矛盾する点はないようです。前掲の杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ研究』においては、『美人の面影』の表紙写真（モノクロ）が掲載されているのだが、その表紙は、この国立国会図書館所蔵本とは異なり、女性の上半身の絵が描かれている。杉崎はこれが「筆者架編者の初版本」であると解説している。また一方で、高田知波は、前掲論文において、『表紙に記載された名義』は『春の屋おぼろ補助／嵯峨のやおむろ著』とされている。しかし、国立国会図書館に本を仮に、高田本、杉崎本、国立国会図書館所蔵本ともに、わかる範囲での相異点を示すと次のようになる。

○国立国会図書館本

『表紙』春の屋おぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（その他不明）

○杉崎本

『表紙』美人乃面影／春のやおぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（絵入り）

○髙田本

杉崎の言う『内題』が扉のものであるとすれば、春のやおぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（その他不明）
高田本の表紙に絵があるかどうかは不明だが、高田が前掲論文で『苦楽の鏡』と『美人の面影』を絵入りである杉崎本と比較すると、著者名の表記がやや異なっている。この表記だけでも見れば、国立国会図書館と共通しているようにも思えるが、ほかの情報がないため、断定はできない。

また、扉については、杉崎の言う「内題」が扉に記されたものだとすると、扉餅と国立国会図書館本はまったく異なる扉を持つことになる。

高田本については、残念ながら情報が少ないため何とも言えないが、杉崎本の表紙については、絵入りであ
る点でも、記載されている情報が題名および『春の屋おぼろ補助／嵯峨のやお室著述』である点でも、まさに『苦楽の鏡』と同様に絵入りである。それに対して、国立国会図書館本の表紙は、絵入りでないばかりか、『僕書房』ではなく『僕書房発行』と比べてみたところ、岡本は明治二十一年から十二年にかけての一時期、一部の本は岡本書房の名で刊行していたようだ。
三川 智央

もし、いずれかが「再版」であるならば、その際に装幀も変更されたと考えられるが、国立国会図書館本には奥付に「再版」の記載はない。また、杉崎本も「初版本」とされている。では、なぜこのような異装幀が存在するこ
とになったのか。詳細はわからないが、少なくとも、国立国会図書館本の方は、初期の一時的（あるいは仮の）装
幀だったと考えることはできるだろう。国立国会図書館本には、扉の部分に「東京図書館（明治十二年四月十六日
発行）」と呼び、「内交」の受入印が押されていたが、そうした納入本の中、旧上野図書館（明治二十二年四月
十一日）に交付されたものを「内務省交付本」（内交本）と呼ぶ。内務省への納入が行われた後、何らかの事情で、装幀の変更が行われたと考えることがで
できる。理由は不明だが、奥付の著作者が「香川県立名義である」と関係があるかもしれません。内務省へ
納入された書館本の扉に「香川県立著」であることも考えると、当初は表紙も「香川県立著」として準備を進めていたのを、
急に「春の屋おほ補助／嵯峨のやお室著述」に切り替えることになったと考えると、つじつまが合うようにも思
う。その際、同時に「苦楽の鏡」と同じように絵入りの表紙を準備しようとしたのが、それが遅れたため、最初の
装幀分のみ、文字だけの簡略的な表紙になったのではないかということだ。ただし、これはあくまで表紙および扉
の装幀の問題であり、本文そのものは共通のものと考えてよいだろう。なお、各刊本の価格について、わかりの範囲で確認しておくと、「守銭奴の財団」については、国立国会図書館所蔵
本には「定価二十五銭」の押印があるが、「東京日日新聞」には、明治十年三月一日の「特別正価金三十銭」、同月九月一日の「版書籍特別廉価倹売発売」として「正価金三十銭」、明治二十年一月四日に「正価金廿五銭」の「美人の面影」と「西脇の鏡」の掲載の広告が掲載されている。また、『美人の面影』については、国立国会図書館所蔵本に「原価金廿五銭」の押印があり、明治二十一年九月二十七日の『東京日日新聞』にも「定価二十分銭」についての広告が掲載されている。

次に、本来ならば作品が発表されたと思われる新聞紙面を確認すべきところだが、先行研究で報告されていたように、『美人の面影』『苦楽の鏡』についても、同じ結果であった。結局、現時点で具体的に確認できたのは、残念ながら紙面の所在そのものの確認ができなかった。また、上の情報のみということになる。ここから各作品の成立時期を絞り込むためには、各作品の刊本から得られた録といったものを史料とする考察を進められる。

このような場合、一般的に最も信頼度が高いと思われるのは日記であるが、実に自身が筆で帳面に書きつけた「幾むかし」と題する日記の抄録が残っている。これは、杉崎も先ほどの『嵯峨の屋おむろ研究』の中でふれていたもののだが、嵯峨の屋おむろ初期作品の成立および出版に関する考察。
三川智央

遙遠が「明治五年から同十二年までの主要事項を記録したもの」だろうとされている。「九七年四月」を確認することができたので、「九七年四月」の記載をもとに、それを遙遠の星の回想録などと

○明治二九年

五月

廿三日 長谷川 蠼崎来謁

八月

廿日 此夜冷々亭主人 矢崎と共に来る

十月

廿四日 此に来新聞の論説を補足す

矢崎の裏店の噂を剥正す

欄外 十二日 浪花新聞香川某

「神経の罪」の稿を今月より今日新聞に掲載す

同三日より矢崎顕四郎寄寓 嵯峨のやおむろと附ける

廿日 浪花新聞岡田竜呂を以て寄稿を乞ふ

若しくは詫す

金港堂主人小説の著作を依頼す

十一日 金港堂へ嵯峨のやの稿を売る
ふものを初めて書きましたが、「守銭奴の腹」（明治十九年）というふのです。これは、三木に心酔して居る頃で、三馬を読んで時の感情で下等社会を主材にして書いていたものでした。其頓坪内（遙遙）そんな時々小説を直して貫つて居りました」と述べていて、「守銭奴の腹」を「明治十九年」としているのだが、これはもしかすると、自分の書いた下書き（裏庭の戸）を遙遙に直してもらう、作品が完成した年として記したものかもしれない。作品そのものの成立という点では、「明治十九年の八月頃、すでに形を成していたと考えることができるのである。その後、嵯峨の屋は「坪内先生の玄関の書生となった」のだが、「幾むかし」を見ると、それが明治十九年の十月三日であったことがわかる。そこで初めて作家「嵯峨のやおむろ」が誕生する。問題は、これに続けて記載されている、「神経の罪」は嵯峨の屋の小説であり、「今日新聞に掲載」されたとすれば、嵯峨の屋の小説第一作は「神経の罪」である。もし、これが嵯峨の屋の小説であるなら、「今日新聞に掲載」されたとすれば、嵯峨の屋の小説第一作は「神経の罪」である。もしかすると、「神経の罪」は嵯峨の屋の小説ではないかと思い、ほかの回想録をあたってみたが、遙遙は、「幾むかし」よりも後であり、遙遙は「幾むかし」の記録を見ながら遙遙を執筆したのだろうか、あるいはこの随筆の方が「幾むかし」よりも後であり、遙遙は「幾むかし」の記録を私に加筆で載せたのも、「十九年の十月」と記している。もっとも、自分が「加筆」した作品が誰のものであったかを問う方は思わない。まして、当時、遙遙は「今日新聞の論説を
補助としていたのであり、何らかの事情で掲載が取りやめになったのなら、記憶に強く残っているはずでもある。したがって、『二葉亭の一生涯』の中に、次のような一節があることに気づいた。

この一節に於いて、山田博光は、「日本近代文学大系60近代文学回想録」に収められた「おもひ出す人々」に改められた。「おもひ出す人々」に改められた。大倉廼文によって刊行された際に、「守銭奴の腹」は、明治十九年八月に遅きに改題された。「守銭奴の腹」は、明治十九年八月に遅きに改題された。「守銭奴の腹」は、明治十九年八月に遅きに改題された。
というのです。という嵯峨の屋自身の記述も、新聞掲載の年をふまえて書かれたものとして納得できるし、これまではさまざまな矛盾点もしばしば解決できるように思う。また、『守銭奴の肚』の刊本のデータでは、『板権免許』の取扱が明治十九年十月十二日となっているが、『今日新聞』の掲載（連載）と並行して出版される話は進んでいたとす

次に、『ひとよぎり』に目を向けたよう。『幾むかし』に、直接『ひとよぎり』という作品名は登場していない。ただ、これはあくまでも推測に過ぎない。なぜなら、明治十九年十二月二十一日の乗記に、『金港堂へ嵯峨のやの稿を売る』というとある。現在のところ、この原稿は完成した状態で遺影の手元にあり、彼は嵯峨の屋のため、発表を考えていない様である。これが、この原稿を購入したのが、次に、十二月二十日に『金港堂主人小説の著作を依頼す。』とあり、これが受けてのことだろう。この日、嵯峨の屋の原稿は港堂側で売られ、刊行までに一年もの時間差が生じてしまう。この期間を、『ひとよぎり』が原稿されたのは明治二十年十二月である。金港堂が遺影に『小説の著作』を依頼した際に期待していたのは、あくまでも察推測に過ぎない。それでも、仲川登日の回覧号の原稿が港堂側で売られることに納得できる。
ただ、遺遙として、自身が多忙な中、これから新たな小説を準備するよりもも、すでに手元にある未完成の十二月の面影の書き下ろしは、『新人の面影』と『苦楽の鏡』二作だが、『幾むかし』に記録があるのは、『新人の面影』のみである。『浪華新聞』関係としては、まず、明治十九年八月の欄外に「十二日 漫花新聞香川某」とある。香川某とは、『新人の面影』の引用部分で、彼のことを『湧華新聞』創立スタッフのひとりとして同社内で重要な地位を占めていた人物である。彼が、『幾むかし』に「是非なく譜す」と表現されていることからも、遺遙の小説の連載を求めて再三やってきている人物と見られていた。

遺遙の自身のものではないが、遺遙の屋の『新人の面影』であった。『浪華新聞』側では、このことをどのよう
私は明治十九年に今日新聞を去って大阪で発行する浪華新聞（明治九年頃の浪花新聞は花の字この浪華新聞を使わせられ坂崎紫壇氏と共に同地に赴いた。）

峨の屋おむろ氏の言文一致の新紙を載せたので評判よく、初めの内は各商店の店頭に売られ行きもあったが、次作の寄稿依頼をしてきただろうことも充分に想像できる。先行研究において、高田や杉崎が推測していたように、『美人の面影』は『南朝新聞』に連載された的可能性が非常に高いと言える。そして、そのように考えると、この一つの作品がともに香川倉一の名義で同じ大阪の倉本書房から、同じ時期に描かれたということよりも納得いくのである。
以上、嵯峨の屋の初期四作品『守銭奴の肚』と『ひとよぎり』『美人の面影』『苦楽の鏡』について、その成立時期を考えた。嵯峨の屋の作品の中では、やはり『守銭奴の肚』が最も早く成立した作品だと言える。刊行された『守銭奴の肚』は、嵯峨の屋の代表作で、二葉亭とともに嵯峨宅を訪問し始めた頃に、すでに草稿ができていたのだろう。

その後、次に成立したのが、おきの肚の珠玉を祝文ほしがる『苦楽の鏡』である。出版は明治二十年十二月であるが、『美人の面影』と『苦楽の鏡』に関しては、まず、明治十九年十二月下旬から明治二十一年二月にかけて『美人の面影』が完成し、その後、続いて『苦楽の鏡』が完成したと考えられる。草稿としては、

二五
三川 志央

それ以前に存在していたかもしれないが、遙遙の手が加えられ、新聞掲載のための作品として形を成したのは、

新聞社からの依頼を承諾した後と考えてよいと思われる。

これまでの研究において、この四作品は、出版あるいは新聞紙面への掲載時期を考慮することで、「守銭奴の肚」の考察や評価が行われてきた。しかし、本稿における考察の結果、成立立たなかったかのように漠然ととらえられ、それをもとに内容と考察の順で考えられるのが妥当であることがわかった。もし、従来の研究のように、「ひととぞぎ」という作品のみによれば、他の三作品よりも進歩した近代的な要素を読み取るならば、そこには単純に進歩を伴った創作の時期を比較してみると、「守銭奴の肚」は、出版が明治十九年十月で、成立は明治十九年の十二月というよう、一年も満たずが生じている。近代文学において、一般的な作品に対して、成立が明治二十年一月であるのに対し、成

立は明治十九年の八月までかのぼることができ、ひととぞぎの場合は、そうした一般的な場合とは異なる。遙遙の手作りの作品はありながらも、そこには明らかに遙遙の手が加えられたものがある。また、二葉亭が、遙遙の屋の発表前の原稿を目にすることがなかったとも言えない。つまり、嵯峨の屋の作品が形を成す中で、遙遙や二葉亭が、嵯峨
屋の作品から影響を受けるということもあるのではないか。明治二十年前後の小説の実態は、実在、そのよう

な微妙な領域において考察することで、とらえられない要素を含んでいるように思う。

【注】
1）杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ』（講談社出版、昭和五年三月）の瀬沼茂樹による「序」。
2）石橋幸月『気取る之丞』「舞姫」『国民之友』第七号、明治三十二年三月三日、引用は、「明治文学全集23」山田美妙。
3）嵯峨の屋おむろ、『矢崎嵯峨』『春陽堂文集』（編摩書房、一九七一年八月）を参照。
4）嵯峨の屋おむろ、『矢崎嵯峨』『春陽堂文集』（編摩書房、一九七一年八月）を参照。
5）『明治文学全集17』『矢崎嵯峨』『春陽堂文集』（編摩書房、一九七一年八月）を参照。
6）嵯峨の屋おむろ、『矢崎嵯峨』『春陽堂文集』（編摩書房、一九七一年八月）を参照。
7）田辺茂雄『新訂明治文学史』下巻、『東京堂、一九四九年一月』、および『明治大正文学全集』第二巻、『矢崎嵯峨の屋』『山田美妙』。
8）『明治文学全集47』『明治短篇集』（編摩書房、一九七一年八月）に収められている小説は、前掲が『野末の話』『くされたまご』に収められている。
吉田精一『明治短篇集解説』（日本近代文学大系47 明治短篇集）角川書店、一九七〇年五月

中村光夫『解題の十四信介執筆部分』明治文学全集17 二葉四述、嵯峨の屋とる集编摩書房、一九七一年二月

杉崎俊夫執筆・項目『嵯峨の屋とる』（日本近代文学大事典 第二巻 講談社、一九七七年二月）

高田義波『嵯峨のやおむろの作家的出発』『無味気』の前後 （東京大学国語国文学会 国語と国文学 第五六巻 第九号、一九七九年九月）

高田はこの点に関し、『注』の中で明治二十年度前半の『浪華新聞』は所在が不明であり、実物を閲覧することのできない同紙の九月以降の分には、『美人の面影』も『苦楽の鏡』もともに掲載されていないので、私、杉崎俊夫が『守銭奴の肚』を引くことはできない、とある。なお、高田は引用文で『美人の面影』の前を掲載していないので、私の推測は仮説的であると考えている。
第八章「気質にかわるもの」
二「読三瞑当世書生気質」
以後
において、嵯峨の屋の作品として「ひとよさら」
と『美の面影』を取上げる。「ひとよさら」は
まちがいない気質の形式を踏襲したといい
作品であるのに
対し、『美の面影』は「気質物に接近しながら、そこから離反しようとする傾向が示されている」と評価している。

21 国文学研究資料館「明治期出版広告データベース」で確認。
22 『日本近代文学大系』第60巻
23 『日本近代文学回想集』（角川書店、一九七三年二月）
24 所収の内田魯庵『おもひ出し人々抄』の注釈。